

滋賀県大 BASSER'S ～3年間の活動でみえたこと～

○北野大輔・曾我部共生（滋賀県立大学）

【背景・ねらい】

「滋賀県大^{バサニズ}BASSER'S」は、琵琶湖の内湖の一つである神上沼において、定期的に外来魚の駆除を行ない、神上沼に生息する外来魚の数を減少させ、在来魚類にとって棲みやすい環境を作ろうとしている。また、それと並行して在来魚類のモニタリング調査を行なっている。内湖は季節によって魚の移動が顕著に見られる水域であるため、こうした内湖におけるモニタリング調査を継続することで、外来魚駆除の効果と在来魚類の生息数の変化および季節変動を調べることができる。本発表では、この3年間の活動を通して見えてきたことについて報告する。

【成果】

1. 在来魚類の季節変動

これまでに神上沼では、20種の在来魚が確認されている。3～6月にかけて、ホンモロコが出現した。オイカワやフナ類、モツゴなどは通年確認された。

2. 外来魚のCPUEの推移

3年間の活動を通して、月ごとのCPUE（Capture Per Unit Effort：単位努力量あたり漁獲量）を算出したところ、オオクチバスでは、5月および10～12月にピークが見られた。一方、ブルーギルでは6～7月および10～11月にピークが見られた。5～7月は両魚種の産卵期にあたり、接岸した個体を効率良く捕獲できた。また、10～12月にかけては、水温の低下に伴って神上沼の流入水路では外来魚の蝸集が見られる。こうした蝸集を狙うことで、効率良く捕獲することができた。

3. 外来魚の食性の季節変化

餌料重要度百分率（%IRI）の変化から、オオクチバスおよびブルーギルの食性の季節変化を調べたところ、オオクチバスはエビ類を、ブルーギルは藻類を重要な餌料としていた（図1、2）。また、オオクチバスでは3～4月にかけてのホンモロコの出現に伴って、ホンモロコに対するIRI値が高くなった。さらに、12月にはオオクチバスが流入水路に蝸集するため、水路の側面に張り付いているヨシノボリ類が重要な餌料となっていた。

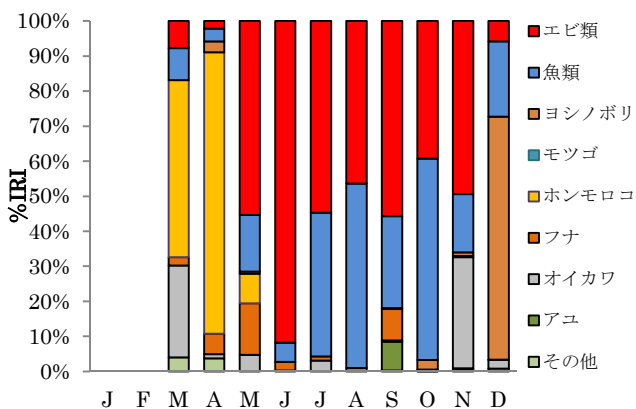


図1. オオクチバスの餌料重要度百分率（%IRI）

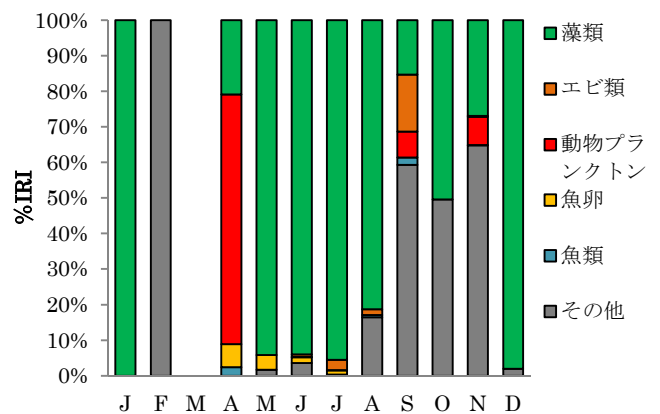


図2. ブルーギルの餌料重要度百分率（%IRI）